九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

炭坑の暮し ： 福岡県嘉穂郡稲築町での聞き書き

香月, 靖晴
福岡県立稲築高校

https://doi.org/10.15017/13716

出版情報：エネルギー史研究 ： 石炭を中心として. 12, pp.132-155, 1983-06-30. 九州大学石炭研究資料センター
バージョン：
権利関係：

炭坑の暮し

――福岡県嘉穂郡稲築町での聞き書き――

香月靖晴

一、稲築町と炭坑

稲築町は、福岡県旧嘉穂郡（現飯塚市・山田市・嘉穂郡八町）の中央部に位置し、旧郡内の二市五町に境を接する。町の中央を南北に、飯塚市から大分県日田市への国道二一一号線が通じ、交通量も多い。鉄道も、石炭運搬のために発達し、国鉄後藤寺線と漆生線があり、旅客、貨物共輸送量が多かった。今、漆生線は廃止路線にあげられているが、町民の反対運動が続けられている。

町の中央部を、この地方で嘉麻川と呼ぶ遠賀川本流が北流し、支流の山田川が合流する。この地域は、稲築の名が示すように、これらの川の両岸に広く田がひらけた穀倉地帯であった。『日本書紀』の安閑天皇二年の「鎌屯倉」も、この地に置かれたと説く人もある。

稲築町は、昭和十六年（一九四一）四月に町制を施くが、明治二二年（一八八九）四月の市町村制実施で、それまでの山野・口春・岩崎・漆生・才田・平・鴨生の七カ村が合併して稲築村になり、それぞれが現在の大字である。村名は、稲を敷いて神功皇后の一行を迎えたという伝説がある漆生の稲築八幡宮からとり、役場を中心部の岩崎においた。当時の町勢は、〔表1〕のように戸数五〇五戸、人口二、九二六人であった。

炭坑は、明治初年の『福岡県地理全誌』に石炭砿場、山野三・漆生二・才田一・鴨生二があげられているので、狸堀的な小炭坑があったのだろう。明治三一年（一八九八）高野江基太郎著の『筑豊炭砿誌』には、山野に坑夫約三百人、借区坪数二六万二千坪の嘉穂炭坑をあげている。内容は「明治二九年二月中開坑工事に着手し今尚其の工事中にあり」とし、運搬には「飯塚停車場忠隈坑炭積場迄凡そ七百三十間の間亦九ポンドとの鉄道を敷き」とあるから、現在の穂波町境にあった忠隈炭坑系の炭坑と思われる。その他は、まだ未開坑借区の状況だが、坑区は〔表2〕のように、稲築町全体にわたっている。

稲築町で本格的に石炭産業が発展するのは、中央から三井資本が

年号	年	戸数 世帯数	人口
明治	11	469	2,456
	22	505	2,926
	31	595	3,431
	41	1,681	4,648
大正	8	4,026	15,065
昭和	10	5,126	25,791
	15	7,551	38,865
	25	8,819	44,514
	35 12月末	9,841	44,904
	45 12月末	7,196	24,103
	57 4月末	7,429	21,729

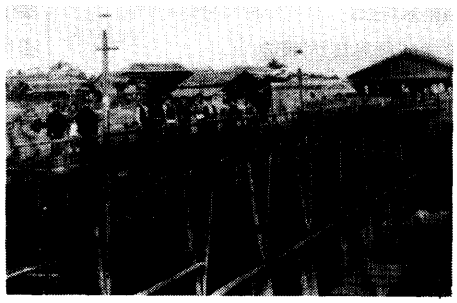
〔表1〕稲築町人口の変遷
注　昭和25年以前は調査日不明。
稲築町役場資料と『稲築町誌』から作成。

明治三一年二月口春字鼠尾に第一坑、同年六月山野字畝割に第二坑を開坑してからである。その後、三井の外、三菱・日鉄の大手資本や中小炭坑が〔表3〕如く開閉坑を繰り返す。その間、〔表1〕のように町勢は盛んになり、町民は全国屈指の村であったし町であると自慢した。戦中・戦後は、食糧難・戦災・外地引揚など、都会からも多くの人々が特に大手炭坑に職を求め、文化面でもスポーツ面でも著しく向上した。三井山野鉱の社会人野球チームなど、筑豊の運動・文化サークルが全国的に活躍して、マスコミをにぎわした。昭和三十年（一九五五）三月の鳩山一郎内閣には、筑前炭坑々主西田隆男参議院議員が労働大臣に就任した。

坑主人名	借区坪数	大字
	(坪)	
荒木源蔵	836	山野
原六郎	423,200	漆生、外1大字
原田吾六	421,651	岩崎
島田純一	333,768	平
有竹福太郎	105,210	口春、外1大字
稲石秀雄	59,802	漆生、外1大字
三菱合資会社	201,427	鴨生、山野、外1大字
河野修造	478,867	山野
野見山米吉	155,229	鴨生、岩崎、外3大字
小寺幸次郎	191,477	漆生、外1大字
三井砿山合名会社	609,996	山野、外2大字
荒牧常次郎	26,258	山野
永光利太郎他1名	62,962	漆生
徳永安兵衛	314,882	平、才田、漆生、外1大字

〔表2〕明治30年末、稲築町関係未開坑借区炭坑。
注　筑豊石炭砿業組合調。『筑豊炭砿誌』から。

しかし、昭和三十年代からの炭坑閉山のあらしの中で、大小炭坑を問わず、次々に第二会社に移行したり、閉山していく。悪いことに、昭和四十年六月一日の山野炭坑ガス爆発の大変災は、町民にとって精神的だけでなく、経済的にも大打撃であった。昭和四八年には、山野・漆生両鉱業所の閉山で、稲築町内から一切の炭坑が姿を消し、町内には沈滞の空気が深まっていく。町行政を始めとして、企業誘致などに努めるが、期待した程の成果はあがらず、人口も最盛期の半分以下の現況である。それでも、町民の意欲は旺盛で、町公民館の諸活動は、近隣自治体の注目を集め、町民吹奏楽団やバレーボールなど、全国的な大会にも出場する実力を持ち続けている。



明治40年頃　三井山野鉱洗炭機とさん橋

〔表3〕稲築町の主な炭坑の歴史

年	次	内容	所在地
明治	31	三井山野一坑・二坑開坑	口春・山野
	39	三井漆生坑開坑（大正10年廃坑）	漆生
	〃	三井鴨生坑開坑（後、三坑）	鴨生
	42	三菱鯰田五坑開坑	鴨生
	45	三井鉱山株式会社発足	
	〃	三井漆生に二坑開坑（後、四坑から一坑）	漆生
大正	7	三井第五坑開坑（昭和13年第一小舟坑）	平
	8	日鉄稲築坑開坑	漆生
	14	三井山野一坑・二坑閉山	口春・山野
昭和	11	筑前炭坑開坑	口春
	〃	日本炭業KK、新山野炭坑開坑	岩崎
	〃	三井杉谷坑開坑	漆生
	13	第二筑前炭坑開坑（西田坑）	鴨生
	14	三井第一竪坑開さく	鴨生
	19	三井漆生葉月坑開坑	漆生
	20	共同石炭KK、日吉鉱業所稲築へ移転	才田
	25	吉田鉱業ＫＫ、辻炭坑開坑	才田
	27	三井第一竪坑完成	鴨生
	30	三菱五坑閉山、第二会社福菱五坑発足	鴨生
	〃	三井第二竪坑開く	鴨生
	31	日鉄稲築鉱閉山	漆生
	32	渡辺鉱業所稲築炭坑開坑	漆生
	36	三井鉱山の第二会社漆生鉱業所発足	漆生
	〃	福菱五坑閉山	鴨生
	37	新山野鉱業所閉山	岩崎
	38	三井山野鉱業所閉山第二会社山野炭坑発足	鴨生
	〃	佐々木興産ＫＫ、鴨生炭坑発足（翌年閉山）	鴨生
	〃	辻鉱業所閉山	才田
	〃	第二筑前炭坑閉山	鴨生
	40	山野炭坑ガス爆発、殉職者237名	鴨生
	41	三井山野第二会社小舟鉱業所閉山	平
	42	渡辺鉱業所閉山	漆生
	43	日吉鉱業所閉山	才田
	48	山野鉱業所閉山	鴨生
	〃	漆生鉱業所閉山	漆生

注：この表は、稲築町役場資料及び『稲築町誌』から作成。

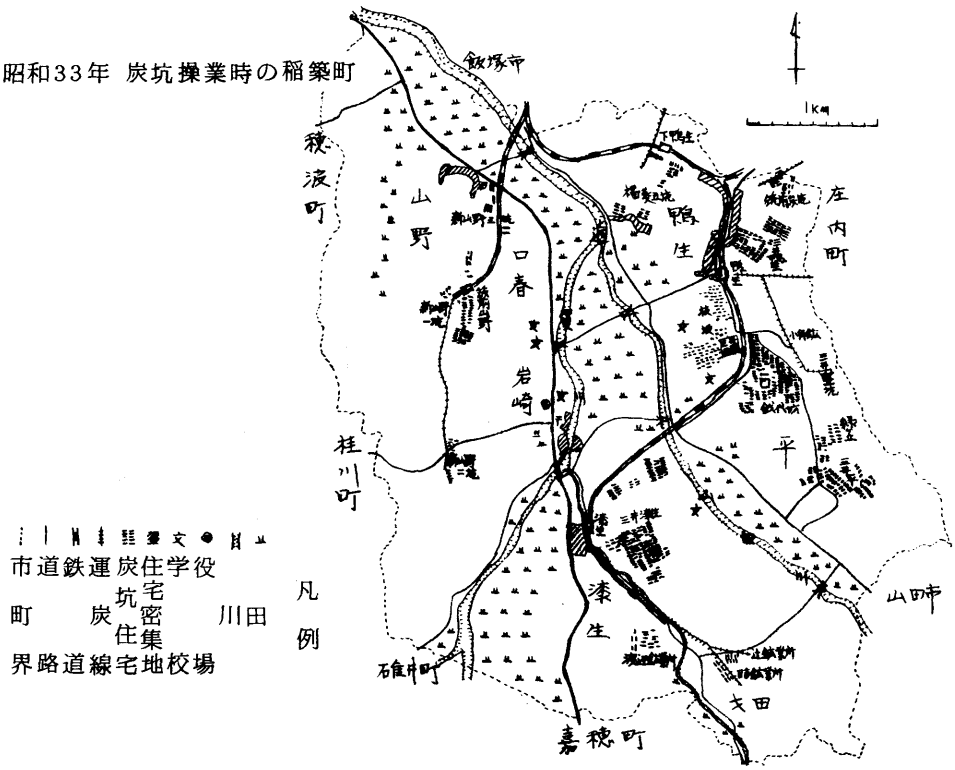
二、炭坑集落

稲築町の炭坑は〔稲築町地図〕のように、旧来の農村集落より山間部寄りにひらかれた。炭坑の開さくが始ると、坑口に近い所に事務所が置かれ、会社の費用で住宅が建てられ、上水道・浴場などが設置された。住宅は、職員と坑員では、位置も間取りも違い、前者は役人（後、職員）社宅と呼び、後者は納屋（後、坑員社宅・従業員社宅）といった。三井山野鉱では、坑員を坑夫と職工に分けて住まわせ、後者を職工納屋と呼んだ。住宅の割り当ては、勤務時間の関係から、坑内勤務と坑外勤務に分けることが多く、出身地別にはこだわらなかった。住宅などの管理は、労務課（勤労課といった頃もある）が行い、「行商人など許可なく鉱地内に立入りを禁ず、労務課（坑長）」などの立札も見られた。

炭坑住宅は、同じ型式の長屋（ハモニカ長屋と呼んだりした）が建ち並ぶので、なれた人でも何棟の何号と数字を頼りに行かねば、

たずねあぐねることも多かった。

昭和33年 炭坑操業時の稲築町

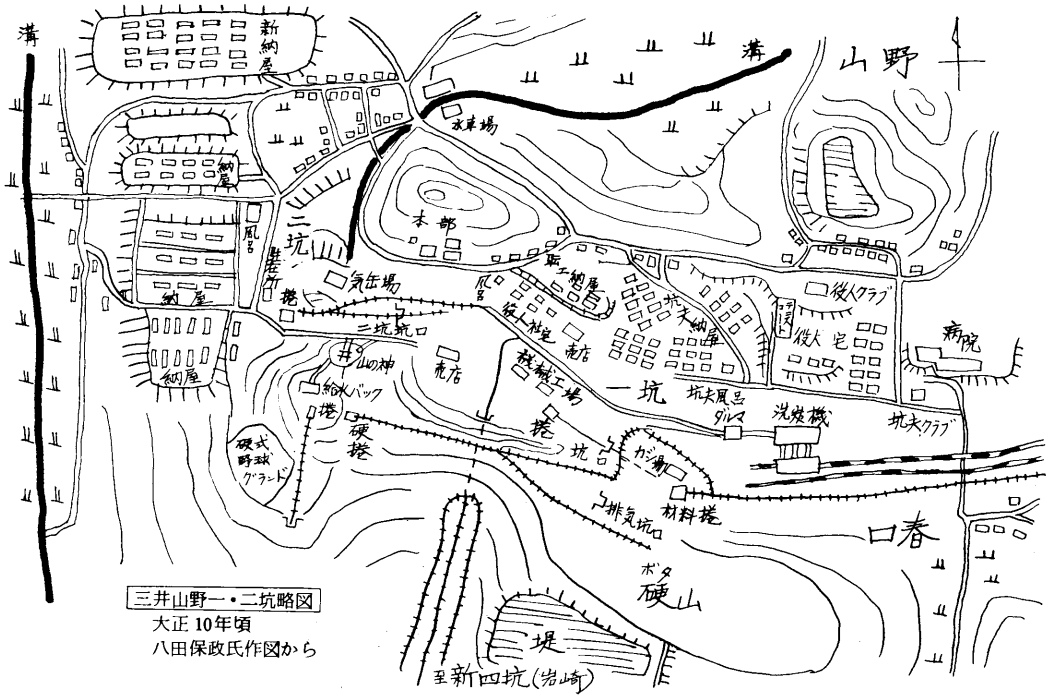


三井山野鉱第二竪坑附近から銭代坊社宅及び漆生・岩崎方面を見る

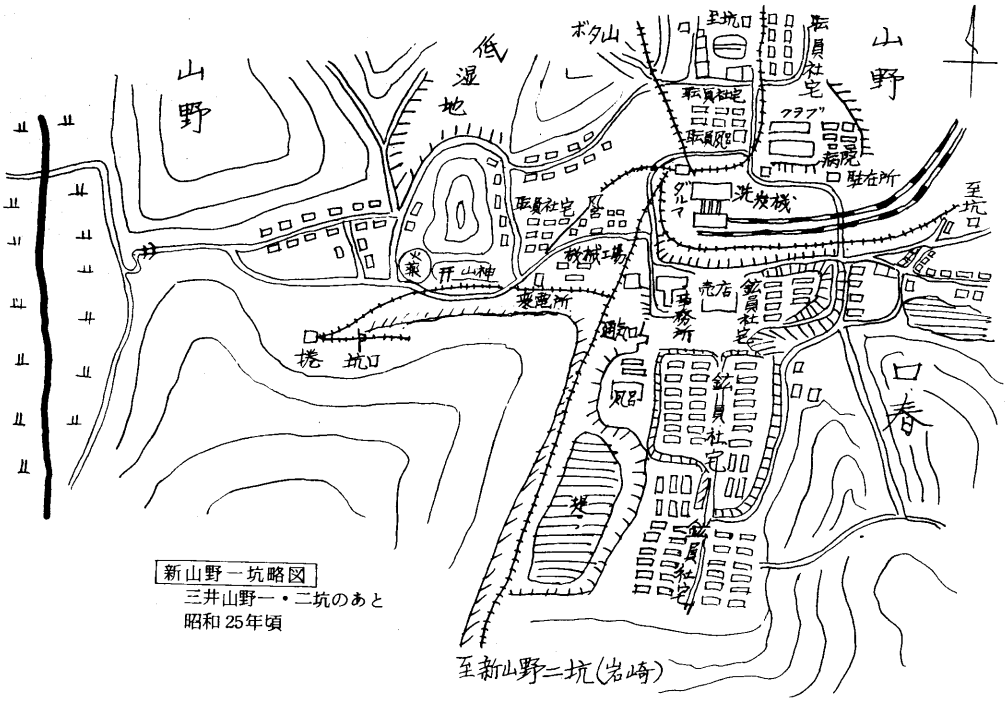
三井漆生坑では、戦時中まで炭坑の周囲に屏を立て、有刺鉄線を張りめぐらし、出入できる道路には労務係が監視していたという。坑夫の逃亡を防ぐ意味もあったろうが、戦時中は占領地域から連れてこられた捕虜（岩崎に中国人ー華工と呼んだー、平の三井山野鉱球場があった所にインドネシア関係のオランダ兵などの収容所があり、炭坑の労働をさせられた。筑豊の大手炭坑に、政府ー軍ーが配当した）の逃亡を防ぐためだったろうともいう。

捕虜に関しては、戦時中日本各地を空襲で焼土化したアメリカ軍爆撃機B29が、敗戦直後は、捕虜収容所上空を超低空で飛んで、落下傘で食糧品などを投下した。日本人が、ひろって自分の物にすると殺されると、語り合われた。炭坑の労務係員などの中には、捕虜に反感を持たれた人もあって、身寄を頼って遠くへ身を隠すこともあった。逆に、食糧難で悩む知り合いの人を、チョコレートなどを持って尋ねる捕虜もあった。外国人が突然家に来たので、悪いことをされるのではないかと逃げようとしたが、その真意がわかって胸をなでおろした経験を持つ人もある。戦後食糧難は、捕虜に食糧を確保するため、労務係の仕事は大変だった。オランダ兵の肉に対する注文はやかましく、肉がないので、子牛の肉を食べさせたところ、「すぐ、バレ（わかって）て」、ひどく追求されたこともあったという。

炭坑住宅は、旧来の農村集落から離れた所にまとめて建設され、



三井山野一・二坑略図
大正10年頃
八田保政氏作図から



新山野一坑略図
三井山野一・二坑のあと
昭和25年頃

農村集落とは全く異質で、生活条件も違った。そうしたことなどから、炭坑部と農村部との違和感があり、農村部の人たちは、炭坑の人たちを「炭坑ン者」とか「炭坑太郎」と、社会的に一段低い視点で呼んだ。もちろん、ムラの行事や祭りにも参加できなかった。炭坑の発展で、農村部から炭坑で働く人が次第に増えたが、差別的な意識はなかなかぬけなかった。商店街は、炭坑とともに発展して他からの移住者が多く、炭坑の人がお客さんなのに、「炭坑ン者」と呼ぶことがあった。一方、三井山野鉱の枝坂社宅のように大手炭坑の上級職員は、収入も多く学歴も高いので、旧来の農村部の人たちに優越感があったし、農村部の人も一目おいた。

坑夫の生活環境は、農村や商店街に較べてひどく劣悪であったが、「赤レンガの煙突の立つ所をめざして行けば、腹をへらすことはない」と、働らけば何とか暮せる所でもあった。集った人たちは、出身地の方言を使っていたが、少しは言葉が通じなくても、気持はすぐにとけあった。住居・光熱・飲料水費は無料に等しく、隣近所は同じような貧しい生活環境で、特に見えをはる必要もなく、「誰かが困っちょると思うたら助け合う、裸のつき合い」の相互扶助的意識が強かった。それは、地底で常に生命の危険にさらされて働かねばならなかった、厳しい労働条件に支えられた共通意識があったと思われる。

炭坑には、〔三井山野一坑・二坑略図〕のように、会社経営の病院や売店があり、娯楽施設のクラブがあった。クラブは、役人と坑夫は別の建物で、それぞれで活動写真（映画）などが行われた。大正頃は無声映画で、弁士がろうそくの明りで台本を見てしゃべった。坑夫の中で、演劇の好きな人たちが弁士をつとめることもあった。比頃は、「目玉の松ちゃん」の尾上松之助の全盛時代で、岩田裕吉・栗島すみ子も人気があり、洋画ではロイドやチャップリンが活躍していた。三井鉱（山野・口春時代）では、芝居や人形芝居、祭文芝居、連鎖劇など、坑外のゆるやかな斜面にむしろで囲いを作り、木戸銭（入場料）をとって行われていた。硬式野球のグランドもあり、役人にはテニスコートもあった。

三菱鯰田五坑は、明治四二年（一九〇九）二月下鴨生に開坑した。飯塚市の鯰田本坑とは、電車軌道で石炭や人や物資を運搬した。今の有松病院の所から下鴨生駅にかけて、坑口をとりまいて事務所・工場に炭坑住宅が密集していた。病院もあって、軽い傷病者をあつかい、重い患者は鯰田の本坑病院に送った。大正末期、炭坑住宅は一・二・三区に分れていたが、風呂は一つで午後三時半頃から夜九時頃までだった。時間外の風呂もあって、坑内から上って来た人だけが入浴できた。クラブで、時々芝居や活動写真があって、炭坑の人は札をもらって無料だったが、部外者は少し金を払って入場した。

三、坑夫の募集

坑夫の募集は、労務が行うが、募集人に依頼することもあった。採用する時には、手の腹を見て、それが硬い方がよかった。字はあまり読めず、書けない方がよかった。中等学校出身などは、「理屈ばっかりゆうてつまらん」と敬遠された。坑夫の入社手続きは、字が書けないので、労務係がしてやった。独身者は、独身寮にまとめて入寮させた。入れ墨の者は、明治期には男の華と誇ったようだが、大手炭坑は早くから採用しなくなった。

炭坑は、各地からの寄り合い集落で、山陰・山陽・四国・沖縄からも多くやって来た。広島県出身者は、金をためるためによく働いたという。しかし、せっかくためた金を一夜のばくちでなくしてしまい、かえって借金のため身動き出来なくなる者もいたとい

う。

炭坑の「人手がたらん時は、よそにやといに行きよった」。その時、労務係が会って会社からの金を貸した。これを肩入れ金といって、「働いた分からかつがつ取った」（賃金から差し引く）。坑夫引き抜きは、戦後もあって、バレル（発見される）とひどいリンチに会った。戦後は機械化が進んで次第になくなるが、特に開坑の時など、腕のいい坑夫を引き抜こうとした。

炭坑労働は過酷で、生活環境は低劣であって、小炭坑になる程状況は厳しかった。誰しも、少しでも人間らしい生活を求める気持があった。炭坑から逃亡することを「ケツワル」といい、夜逃げが多かった。男が背負える程度の品物を持って、一家が逃げた。途中で見つかると連れもどされ、労務で絶対に他所に行かないと認められるまで、ひどい暴力がふるわれた。公衆の面前で行われることも多く、他の坑夫への見せしめもあった。夫がケツワツタあと、妻子が残ることもあった。これは、会社の目をまどわすためで、会社に「妻子がいるから、いつか帰って来るだろう」と思わせることであった。しかし、夫からの迎えの連絡がないので、行き先をたずねてみると、他に女ができていて騒動になることもあったという。

仕事を早退することを「ノソン」といったが、みせしめの暴力は、ノソンを含め怠業と思われた坑夫にもふるわれた。カゼなどで寝ている人にも、労務係（人繰りと呼ぶ所もあった）が強制的に就労させることもあった。拒否する者には、労務の事務所に引き出されて、ひどく暴力がふるわれた。この暴力的傾向は、小炭坑になる程ひどかった。

昭和に入ると朝鮮人の募集も積極化し、三井山野鉱では労務係が現地に行って募集し、朝鮮総督府の移住許可を得て連れて来た。募集の宣伝には、スポーツが役立って、野球の試合をして親近感を持たせたという。戦時中の強制連行はうわさには聞くが、実証的な話には聞き当らなかった。

筆者の中学校（現嘉穂高校）の一年先輩で、新山野鉱に住んでいた、李余禰（日本名木村高明（たかはる））さんの思い出は強い。一時間を歩いて共に通学したが、吉川英治の小説など借りて読んだり、多くのことを教えていただいた。柔道部員で強く、学業成績も優れていて、昭和二十年、久留米工業専門学校を受験して落ちた時、「自信があったとに、朝鮮人やき落とされたとやなかろうか」とつぶやくのを聞いた時、どこにも特っていきようのない怒りを覚えた記憶がある。同年敗戦後の秋も深まった頃、帰国の別れに一夜を語り明したことも、つい最近のようである。その後の李さんの消息は、わからない。

四、住

1、日鉄稲築鉱（大正末期）

坑夫納屋を成績の良い者と、そうでない者を分けて住まわせた。成績の良い者が住む家を、通称「ハワキオトシ」（家の掃除をする時、ごみを裏庭に掃き捨てることができる構造なので、そう呼んだ）といい、六畳と二畳の畳の部屋に板張り半畳、縦・横それぞれ一間・一間半の炊事場があった。家の裏側は雨戸を使い、八人位は生活できた。「ハワキオトシ」に移ることができる時は、友達が酒一升を持って祝いに来てくれた。

「ハワキオトシ」以外の納屋は、畳・板張りの部屋はかわらぬが、炊事場はない。裏側は雨戸がなくて、壁の中央部を横に〔図1〕のような高さ六十センチ位の引き戸があった。

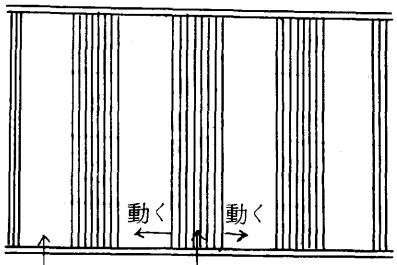
部屋の間取りの変化は、板張りも含めて、四畳半と二畳半→六畳と二畳半→六畳と四畳半とかわる。戦時中、六畳・四畳・三畳の三

部屋になり、六軒長屋から五軒長屋になる。

上水道は、共同使用で納屋の外にあり、バックと呼んだ。家の中では、タゴ（木製のオケ）にためて、竹びしやくかガガ（木製の曲げもの）で汲んだ。クド（カマドのこと）は、長く住もうとする人は、石を並べ泥を塗って作った。石炭ガンガン（石油かんの上を抜いて、中より少し下に棚を作り、下に空気の取入口をあける）で煮炊きする人もあった。後に、会社がコンクリート製のクドを作って配るようになる。燃料は石炭ガラ（石炭をむし焼きしたもの）で、会社で作ったものを買った。

部屋の畳替えは、入社した時会社が整えてくれたが、後はドンゴロス（黄麻で編んだもの）や、ござを敷いて破れた所を覆った。

便所は、長屋に一つ附属している共同便所で、当番で掃除した。夜は暗がりで困るので、会社に電燈をつけさせる交渉もした。汲み取りは、近くの農家が会社と納屋の組長の許可で行った。汲取料は無料だが、関係者に野菜や米などを御礼に持って来る農家もあった。



白の部分は板を固定　縦線の部分の板を連動して左右に移動させる

〔図1〕引き戸

また、納屋の人の中には、近くに少しばかりの畠を作って、肥料にすることもあった。

以上は、家族で住む住宅だが、独身者は独身寮に入れられ、労務が管理した。

2、三井山野鉱

山野に開坑時の坑夫納屋は、ワラ屋根の六畳一間の六軒長屋で、共同便所が附属してあった。各家の炊事場は、粘土で固めた所が入口のそばにあって、石炭ガンガンで煮炊きした。役人社宅は瓦ぶきで、最低三部屋はあった。漆生・鴨生に移っての納屋の間取りは、〔図2〕のようである。

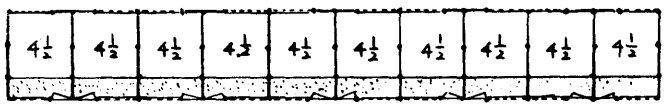
電燈がついたのは、大正八年（一九一九）で、それ以前は石油ランプやカンテラを使った。石油ランプは、ホヤ磨きが大変だったし、カンテラも常に掃除をしなくてはならなかった。

家の戸締りは、盗られる心配がある貴重品は持たないので、かぎをかけることはしなかったし、隣近所のつき合いも緊密であった。時計を持っている家も少なく、出勤時間は労務係が知らせて回った。

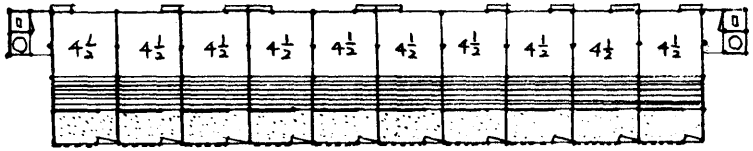
三井山野鉱で、納屋の各戸に便所がつくようになるには、昭和十四年から十六年に出来た銭代坊（せんだいぼう）社宅からである。その頃、会社が納屋を社宅と呼び、坑夫を従業員と呼ぶように指示する。

飲料水は、会社が川からポンプで汲みあげたものを浄化して給水した。炭坑内だけでなく、鉱害の問題もあって、町内に三井の給水を受ける所もあった。昭和に入ると、石炭を水洗いした水を川に流すので、遠賀川は黒く汚濁し、そのため黒味がかった水が出ることもあった。

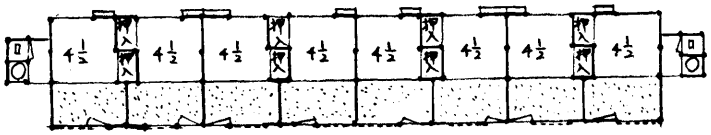
燃料は、会社が作ったガラを買ったが、山野の頃は坑内の木枠などの切れ端を持ち帰って使うこともあった。戦時中頃から、石炭の



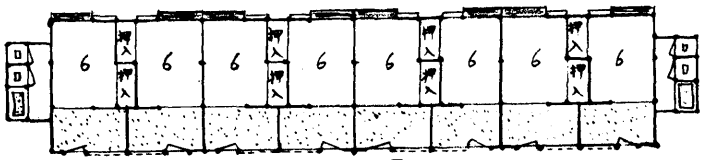
4畳半　10戸建　建坪30坪
$15^K \times 2^K$



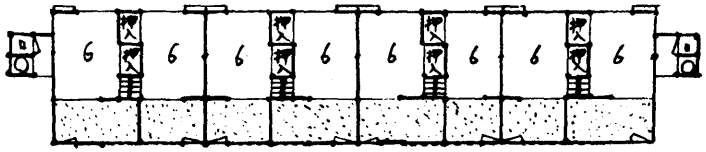
4畳半　10戸建　建坪45坪　$15^K \times 3^K$



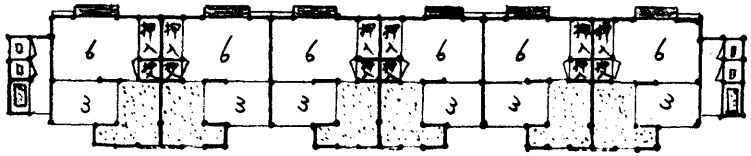
4畳半　8戸建　建坪35坪　$14^K \times 2.5^K$



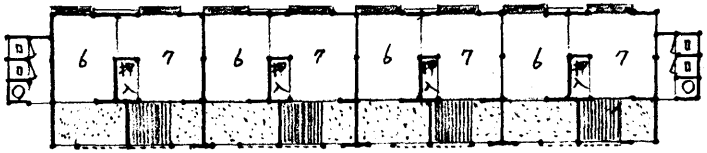
6畳　8戸建　建坪42坪　$14^K \times 3^K$



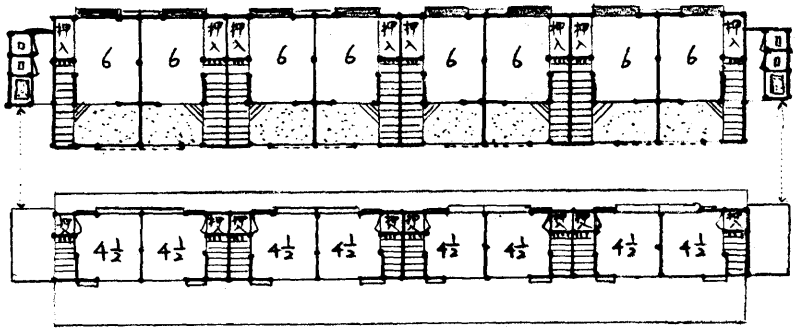
6畳　8戸建　建坪42坪　$14^K \times 3^K$



6畳3畳　6戸建　建坪42坪



6畳7畳　4戸建　建坪42坪　$14^K \times 3^K$



6畳4畳半　8戸2階建　建坪72坪　階下48坪　階上24坪

〔図2〕三井山野鉱業所鉱夫社宅見取図8例
表記坪数のうち便所は含まない。三井山野鉱業所資料から。

粉を小さく卵型に固めた豆炭が使われた。豆炭は三井鉱関係だけでなく、町内各所で作られた。豆炭工場では、夕方からむし焼きにし、一晩中かかって煙が出ない燃料にするため、夕方から町内一帯に豆炭焼の煙が棚引いた。秋の朝、深い霧に濡れた顔をふくと、タオルが霧の核になった炭塵で黒く汚れた。

3、新山野鉱

昭和十一年（一九三六）から、山野・口春の三井山野鉱跡に一坑、岩崎に二坑、山野に三坑と開坑するが、開坑当時の納屋は、六畳一部屋に押入一つと炊事場がある土間で、裏は雨戸・障子の六軒長屋、共同便所であった。戦後の建物から部屋数は増えたが、共同便所は変らなかった。

4、屋内の神仏

炭坑の住宅は、会社の経営計画によって建てられたもので、最大限坑夫と家族が寝起きする条件が満たされればよかった。

明治から大正、昭和に入っても納屋に住む人は、たんすなどの家財道具はほとんどなかったし、やなぎごうりに衣類などを入れる程度であった。毎日を危険な作業に従事しながらも家の中に、神仏をまつるような世帯はほとんどなかったし、仏壇をすえる家は見かけなかったという。しかし中には、先祖の位はいをまつったり、クドの上にちょっとした棚を作って神様や荒神さんをまつり、おひかり（ろうそく）や、おごく（御飯）をあげる人もあった。

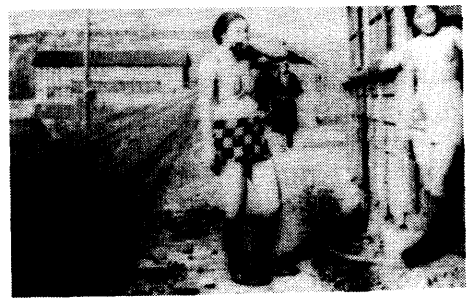
五、衣

坑内の作業着は、大正期まで男はふんどし、女は坑内ベコといって腰巻の短いものをつけて入坑した。パンツ式のものをはいて下る人もあった。作業中は、汗と炭粉で汚れたりまつわりつくので、男女とも素裸で仕事をすることもあった。だからといって特別な感じを持つこともなかったという。

履物は素足にわらじばきだったが、三井三坑（鴨生）では大正十三年、八人の坑夫・坑婦が、会社から地下たびを試験的にはいてくれといわれた。地下たびと脚絆を支給されて使用したところ、安全であり足にぴったりで都合がよいので、皆に使わせるようになったという。

昭和七年、女子の坑内作業禁止令が出て、入坑できなくなるが、特別に入坑する人もあった。戦時中、坑員不足が顕著になると、一時女子の入坑があった。しかし、作業着は昔の坑内ベコ一枚ではなかった。

家に居る時の普段着は夏はゆかた、冬はどてら（たんぜんともいう）であった。戦時中でも、ふろ帰りなど男がふんどしだけの姿が



坑内からあがって（？）談笑する坑婦たち
（場所不明）

ササ部屋で休憩する坑夫・坑婦たち
（場所不明）

あったが、巡査が見つけると厳しくしかりつける状景も見られた。

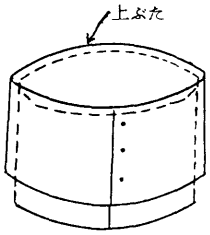
六、食

大正の頃、坑内に持って行く弁当は、〔図3〕のようなガガに御飯や、小型のやなぎごうりに握り飯をつめた。おかずは、漬物に魚の干物程度であった。家庭の状況によって内容も異り、おかゆを竹筒に入れて坑内にさがる人もあった。やがて、アルミニュームの弁当箱が普及し、梅干を入れて日の丸弁当といったり、大型のものを土方弁当と呼んだ。

食事の時間は、職種と勤務の時間帯で違うが、大正の頃の山野での三井鉱の坑内夫は、朝食は四時頃、夕食は五時頃で、昼食は仕事のつごうで適当にとったという。

仕事がすんで家に帰っても、これという楽しみはなく、男は酒を飲んで食って寝るだけという調子であった。酒はボーブラビン（フラスコ型の底が平たいびん）というガラス製の容器に入れ、七厘にじか（直接）にかけて、かんをつけた。女も一緒に仕事をあがるが、帰りに買物をして炊事をする。しかし、特別な料理ができるわけでなく、「わがいいごとしよった」。主婦はさらに、子育て・近所づきあいと休む暇もなかったが、彼女らはしたたかに生きた。

大正の頃の物価は、三十銭あれば飯塚に行き活動写真を見て、帰りにウドンを食べ、酒のカンビン一本が飲めた。当時は、「ひよこ」や「千鳥饅頭」の名は聞かず、今の飯塚本町商店街の有田陶器店の前あたりに、九州堂というまんじゅう屋があって、破れまんじゅうがおいしかったという。



〔図3〕ガガ

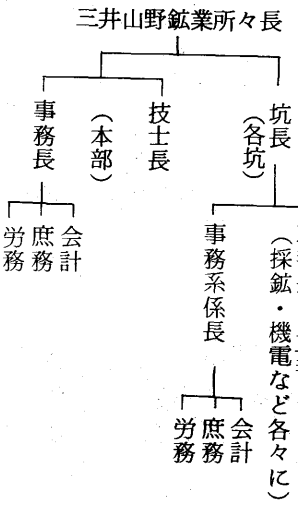
日常の食べ物は、主に炭坑の売店で購入した。たまには、ワラビ・ゼンマイ・山イモなど近くの山に採りに行くこともあった。山イモ掘りは、炭坑の技術を生かして上手な人もあった。夜、川に魚を取りに行くこともあった。「魚がじっとしているところにじわっと近より、のこぎりの背でたたいて」取ったり、もりで突いたりした。

七、生産

三井山野鉱業所の戦前の機構は、〔表4〕のようで従業員を職員と雇員にわけ、雇員の中から優れた者を特選従業員としたが、職員にはなれなかった。昭和十六年に技術員養成所ができ、一年間の学業を卒業すると職員になった。第一期の卒業生は四人であった。二期生から人数は増えるが、四年位で廃止された。

作業現場の指揮系列は、工手長→工手→小頭→坑夫と呼ばれていたのが、係長→上席係員→係員→従業員と改まる。

出勤の手順は、坑外従業員は各自、労務課を経て直接職場に行って着到（出勤確認）をつける。坑内従業員は、入坑時刻前に繰込場に集り、所持品などの検査をうけ、アリツケと呼ぶ担当係員の作業ふり分けが行われて入坑した。オノ・ノコ・ツルハシ・エビジョウ



〔表4〕三井山野鉱業所職制表
（戦前）

ケなどの作業用具は、各人の自弁であった。照明は、カンテラの頃は自弁だったが、キャップランプになると、坑夫個人では負担できないし、キャップ室で充電して入坑前に渡した。キャップランプは、十二時間位が使用限度で、キャップランプの受渡し・受取りが入・昇坑の証明にもなった。

坑内作業は、炭層の状況などで当りはずれがあるので、坑夫が条件の良い所に当ろうとするのは当然である。当り場所によって、能率も賃金も違うので、有利な個所に割り当ててもらおうと、係員に贈り物をして便宜をはかってもらうこともあったという。採炭は、二人から四人で組を作って作業をした。責任感があって技術が優れた人を先山といって石炭を堀った。他は、あとむきといって石炭の運搬・積込や補助的な仕事をした。

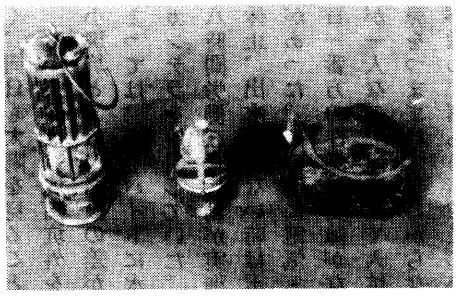
坑内での問題点の一つとして、大・小便の処理があった。便所の施設がないので、坑道の隅で行う。少し入れば真ッ暗闇だから、人から見られることはない。しかし、排せつ物の匂いは消せず、小便は通風の悪い所では塩分の匂いがし、大便は枠の根元にして土をかぶせたが、匂いがひどかった。坑内でもハイ（ハエ）がいて、そばを通るとハイが口の中に入ることもあったという。それも戦後は条件が少しは良くなり、大便だけは汲み取りにかわる。

賃金の計算は、採炭は切賃といって、作業現場毎に一函（炭車一台）いくらと決め、積増し、不足分、ボタ（不燃物）を差引き計算して手取り賃金を決めた。炭車には〔写真〕のような炭札をつけて、掘った人の確認をしたが、時には不心得者がいて札をすり替える者もあった。掘進（坑道を掘り進む仕事）・仕繰（坑道の枠を入れる仕事）は、一般に出来高払いで、十五日毎に跡間取りといって、その間の作業の出来高を係員が調査し、当初の契約に照らして賃金を支払った。

坑内夫の賃金は、三井山野鉱で昭和七年頃、採炭は午前三時頃坑内にさがり、夕方四時頃あがって、一日一円二十銭位だった。坑外の選炭婦で、十二時間働いて二七銭だった。大正十三年頃は、採炭

三井山野坑、斜坑の本坑道（何坑かは不明）

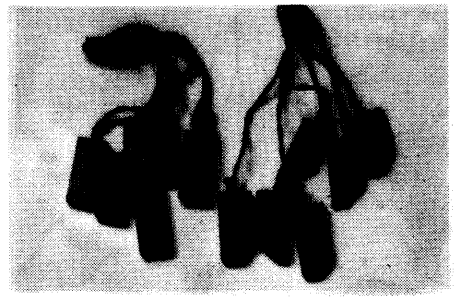
三井山野坑竪坑から入坑する従業員



左・揮発油安全燈　中・カンテラ　右・水筒

三井山野鉱安全燈室

大正期以前の坑内作業（場所不明）



三井山野鉱の炭札（左は木製、右はブリキ製）

夫の一月の収入は十七円だったという。それに対し、大正十年頃の三井山野鉱業所長の月給が百円だったという。

賃金支払日を、「交換」とか「交換日」といった。ずっと以前は、仕事の出来高に対して木札を渡し、支払日にその木札と引きかえに賃金を渡したので、「交換」という言葉が生れたという。また、働いている炭坑の売店だけしか使えない紙幣が支払われた時期もある。「見合い」という前貸し制度もあった。坑夫が借金した分は、賃金支払の時に差引かれるので、受取るべき額の十％とか二十％とかの人もあった。これでは、その月の暮しに困るので戦後、労働組合の運動や要求もあってなくなっていく。

炭坑の労働条件は、戦後の労働組合活動によって改善され、労働基準法などの法律的なものも背景にしても、炭坑で働らく人たちは、人間らしい生活を求めていく。

戦前、三井山野鉱では大体十二時間労働で、早朝六時に入坑し、夕方六時に昇坑するが、請負給だから予定通りにいかないことが多く、何日も太陽を見ることができない日が続くことがあったという。

労働条件は、坑内坑外を問わず、三井山野鉱のような大炭坑と中小炭坑とでは、格段の差があった。新山野鉱では、戦後でも坑口によっては、カーバイトに水を落す時にでるアセチレンガスを燃やすカンテラを使用していた。当時は、労働基準法が施行される頃で、八時間労働三交代制が実施されつつあった。最夜中の三番方は作業休止、出水が少ない時はポンプ方もいなくて、坑内に無人の時間帯があった。その間に電気・機械関係の修理・取替作業を行って、翌日一番方の作業に支障がないようにした。電気係の三番方は、当番が一人なので、一人で入坑して修理した。カンテラの火が消えると、鼻をつままれてもわからない程の真ッ暗闇、地圧で坑木が折れて土が激しく落ちる音、このあたりで事故死があったなぁと、恐怖感におそわれることもあった。

坑底での労働は、過酷であった。「山本作兵衛炭坑画」に描かれている労働の姿、例えば低い天井の坑道を肩から綱をかけて、四つんばいになってスラ（石炭を入れて引く運搬具）を引きあげる女坑婦の絵を見て坑内で働いた婦人たちは、「この通りやった。口にはいえんごときつい仕事をした」、「作兵衛さんの絵は、私たちが何んやかんやいいたいことを言うてくれる」と話す。朝日新聞の「天声人語」（昭和五五年月日不明）の切り抜きを持って来た老いた元女坑婦は、「この通りバイ。うちのひと（婿さん）と、振り返りや、

大正期の洗炭場風景（場所不明）

よう働いてきたもんやなぁ」と話すことがあるという。その文章に「女らしさが強調される社会にあって、炭坑婦たちはかくもたくましく、およそ女らしくない坑内の仕事を支えてきたのだ。…略…荒くれ男に混って炭塵を浴びた炭坑婦をただ立派だ・逞しいといってのけるのは、現実ぬきのひいきの引倒しになろう。彼女たちは、貧しいがゆえに働かねばならず、過重な労働であるがゆえに逞しくならざるをえなかった」とあった。

八、坑内保安

坑内・坑外をとわず、時代とともに生産技術が機械化され進歩しても、炭坑の作業は常に危険なものであった。特に、地底奥深くで作業する坑内夫は、ガスや炭塵爆発・落盤・火災・出水・炭車暴走などなど、常に生死の境で作業していたといっても過言ではない。それだけ、保安に対しては厳しく注意・監視がなされた。坑道が浅い間は、カンテラでもよかったが深くなるにつれて危険度は高まり、坑内にタバコ・マッチ持参厳禁、照明具のカンテラからキャップランプへの転換、保安規準の順守など厳重な注意が要求された。

ぞれでも事故はなくならず、殉職者二三七名の犠牲者を出した、昭和四十年六月一日の山野坑のガス爆発は、「戦後第二の惨事」とマスコミに報導された大事故であった。当日、地元の稲築高等学校では生徒全員、山野鉱業所銭代坊の会館で、東京オリンピックの映画見学中であった。その観覧中に、生徒の呼び出しがあいついでざわめくこともあったが、それ程大事故になるとは思いもよらなかった。その夜にかけて報導される事故の内容は、生徒の近親者の犠牲者も多く、重苦しく不安な気分に沈んでいったものであった。

坑内事故の中でも、火災による事故も多く、三井山野鉱病院はその効果的治療で知られていた。また、田川郡川崎町真崎の田中病院も火傷の治療が上手だと、遠くから患者が通ってきた。火傷に対する治療法として、次のようなものがあると聞いた。火傷には、身体を乾燥させればよいので、荒神シバの葉をせんじて飲めば、体の水分をなくすのでよい。他に、ゴキブリの黒焼や、雨ガエルの卵と柿シブをまぜて食べるとよいという。

三井山野鉱での採炭現場　マイトの穴を掘る所

マイト発破器

発破（マイトーダイナマイトの略ーで炭層を破砕すること）による事故も多かった。不発のマイトにノミを打ち込んだり、避難が不十分だったり、爆破したつもりで切羽に入った時に爆発したり、悲惨な事故が絶えなかった。明治の終り頃まで、ノミをセットウ（石刀）でたたいて穴をあけ、マイトをつめ、穴を粘土やワラくずでつめ、導火線にはカンテラの火をつけて爆破させた。当時は、三井山野鉱もあまりガスがなかったので、それでよかったが、炭坑の深部開発が進むにつれて、発破器機も進歩し、電気仕掛になる。

炭坑は、甲種と乙種とあり、前者はガス・炭塵が多く、乙種は少

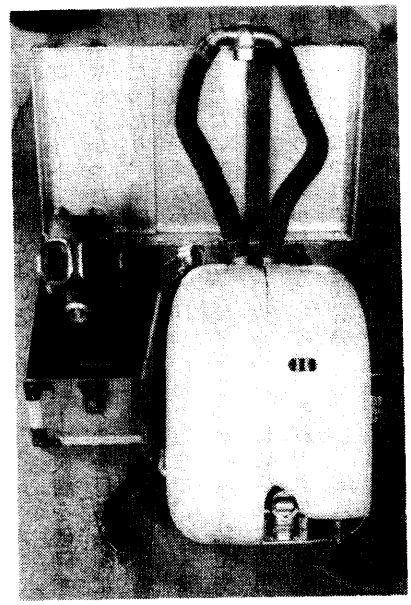
ない所で、筑豊ではほとんど甲種炭坑であった。坑内安全に対しては、鉱山保安法（昭和二四年公布・施行）に細かい規定があり、小さい器具、例えばスイッチでも防爆型が採用された。

三井山野鉱では、坑内保安の最高責任は技師長が持つが、現場の細部にわたっては、法的資格を持つ「坑内保安係員」があたった。その責任を大別すると、通気保安・機械保全・落盤・火災などである。その中でも、通気保安が最も大切で、坑長の下に保安（課）があった。メタンガス・炭酸ガス・炭塵の測定を行い、時には亜硫酸ガスも測った。メタンガスや炭塵は爆発の危険性があり、規定数値をこえると、局所扇風機を置くなど、通気量が増すよう指示した。炭酸ガスが増すことは、酸素が減ることで人体に危険を及ぼす。亜硫酸ガスは法律上測定項目にはなかったが、古洞（ふるどう）（以前に石炭を堀って、使っていない坑道）などにたまることがあり、用便に入った人など倒れることもあった。そのような所では、保安係が木柵を立てて、立入禁止の札を下げた。保安係は、坑内の負傷者にも細かい状況を調査してまとめ、禁止事項、避難などを指示し、保安教育の仕事もした。

三井山野鉱には、技士長の下に鉱務課があり、その管轄下に救護隊があった。救護隊発足のきっかけは、大正二年、筑豊石炭鉱業事務所で救命器使用練習が開始されて、これが大正十二年筑豊石炭鉱業組合救護練習所となり、救護隊員の資格を与えたことによるという。三井山野鉱からも、従業員の中から練習隊員を送り、それが次第に、山野共同鉱山救護隊として整備されることになる。

救護隊は、総隊長の下に各坑（二坑と三坑は一緒）に隊長がいて、指揮班と第一班から第六班ないし第八班までを置いた。各班は、班長一名と隊員五名で編成され、指揮班の器具係一名以外は、他の職務と兼務で、訓練や非常の際に出動した。人選は、各職場から「身心とも健全で、責任感旺盛な」人を、係が口説いた。生命の危険を冒して出動しなくてはならないし、いつ災害が起るかわからないので、常に健康に留意し、所在を明らかにしておかねばならず、進んで希望する人は少なかった。口説かれて、「おやじ（係長）がいうなら、仕方がない」と隊員になるケースが多かった。報酬はあったが、一月に一方分（一日分）位の手当で安かった。訓練は、二カ月か三カ月に一回、全員揃い一日とって行われた。実際の救助出動は、三井山野鉱の災害だけでなく、他鉱の救護活動にも活躍した。事故発生時は、遭難者の救出だけでなく、復旧作業も任務であった。

事故が発生すると、まず探見といってガス検知器で測るが、カナリヤも使った。検知器は測った後でしかわからないが、カナリヤは一酸化炭素に敏感で、かごの中で「バタ狂う」ようだと、人体に危険な状況とわかった。安全燈の一種の、ウルフ燈というのも使った。炭酸ガスが多いと、その消化力で火が消え、メタンガスが多いと、火はすぐ太くなった。古洞に入る時は、通気が悪い所なので、炭酸ガス・メタンガスがたまっており、ウルフ燈がよく使われた。



山野共同鉱山救護隊のK130型酸素呼吸器

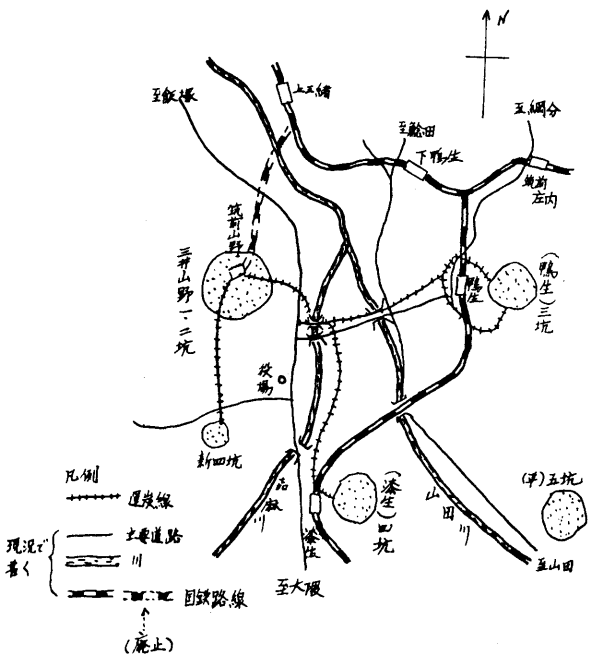
九、運搬

石炭は、堀り出しただけではただの石ころで、消費地まで運送しなくては、その特性を発揮できない。その手段を遠くへ運ぶ順から述べると、まず明治後期まで栄えた遠賀川水運の川艜（川舟と呼び、五平太船ともいった）と、明治中期から筑豊一帯に敷設される鉄道運送がある。次に、炭坑の坑口から移出の地点まで運送する馬車・電車・炭車をワイヤーロープで引くエンドレスなどがあり、さらに、採炭現場から坑口への搬出と、それぞれに特徴と重要性がある。

筑豊興業鉄道が、明治二四年直方から若松まで開通して、石炭の運送を始めるまで、遠賀川の水運が唯一の石炭大量輸送機関であって、川艜船頭（川舟船頭と呼んだ）の収入はよかった。しかし、鉄道の発達とともに次第に衰へ、稲築では明治末にはほとんど姿を消した。現在町内に、川艜の廃材が壁板に利用されて、山野・白門（大字山野）・岩崎・黒田（大字漆生）に残っている。山野では、富有な農家が艜を買入れ、船頭を雇って石炭を運搬した。岩崎の永光軍一郎氏宅の壁板は、「子供の時からあるもので、八十年以上はたっているだろう」との話だった。黒田では、金もうけになるというので、船頭を始めて金にはなったが、バクチで結局金は残らなかったという話を聞いた。

明治三五年六月、三井山野鉱の石炭積出しのため芳雄駅（現在の筑豊本線新飯塚駅）から山野線が開通した。上三緒駅の営業開始も同時である。漆生線が漆生まで開通したのが大正二年八月だから、それまでは〔図4〕のように、三井鉱の鴨生・漆生坑の石炭は、筑前山野駅まで運んで積み出した。筑前山野駅は、大正九年から旅客取扱いを行ったが、山野坑の閉坑とともに旅客・貨物ともに減っていく。昭和十一年日本炭業株式会社新山野鉱業所が開坑するが、乗客は数える程で、列車も一日二便の運行であった。昭和二四年旅客取扱いを停止し、昭和三七年新山野鉱業所が閉山して鉄道の命運がつき、昭和三九年廃線になった。筑前山野駅は、現在の九州指月株式会社工場の敷地内にあった。

鴨生・漆生から、筑前山野駅に石炭などを運送していた運搬線は、〔図4〕のようだが、昭和初期は「馬鉄」と呼んで人も乗せた。台車に腰かけがついて屋根があり、一台六人乗りで、片道五銭位であった。当時、嘉麻川の上三緒（飯塚市）の渡し舟が大人二銭、子供一銭であった。昭和七年はまだ、鴨生から筑前山野駅まで、石炭も運んでいたという。現在の鴨生駅周辺は、商店街・金融機関や病院



〔図4〕 三井山野鉱運炭線（大正10年頃）

などが建ち並び、道路も整備されているが、戦中・戦後は、吉田豆炭工場などもあって、雨が降ると道は「ドカドカになって、鴨生駅前のぬかるみ道」といわれた。

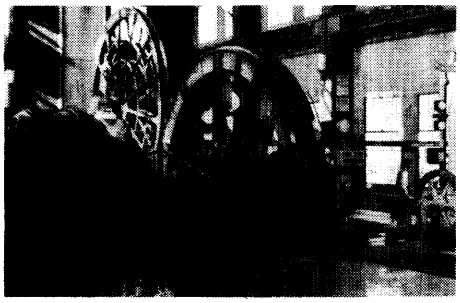
坑内からの石炭搬出には、坑外から捲上機で炭車を坑外に引きあげたが、炭車をきめられた場所に送る作業者を棹取(1)といった。彼等は、他の坑夫と違って派手な服装をして、若い女性の人気のまとであった。

坑内の石炭運送に、三井山野鉱では馬を使うことはなかったといわれるが、平の緑ケ丘の社宅の近くに十三仏などが集められていて、その中に馬頭観音がある。これらの仏像は、三井山野鉱の鉱地内の各所にまつっていたものを、そまつにならないようにと、労務(課)などの世話で戦後集められたものという。馬頭観音は、坑内や坑外で石炭を運送した馬の霊を供養して建てられたものと聞いた。

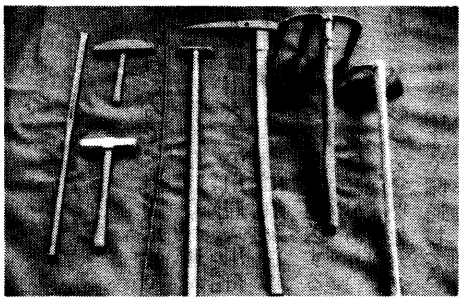
作業用の運搬具として、最も簡単なものが、炭車やスラに石炭を積み込むために使う竹製のエビジョウケ(2)で、炭坑の売店などで買った。坑内で石炭を運ぶスラという箱型のものは、自分の体力にあわせて自分で作った。スラは、主にレールが敷かれていない狭い坑道で使用し、坂を引きあげる時は肩にひもをからって引き、下げる時は手でうけておろした。レールを利用して運ぶものに、炭車と台車があり、炭車は半トン箱の木製であったが、後鉄製にかわる。台車は炭車の箱の部分を除いた台の部分だけで、箱に積めない機械類や資材などを運んだ。

エブやスラで行っていた切羽からの石炭運搬も、次第にチェインコンベアーなどに機械化されていく。

炭坑では、車を止める時に「オーライ」と呼んで、普通の発車合図とは逆に使った。坑内では、騒音があったり、声が坑道中に反響して、止める意味のストップと道具のスコップが混同されやすいので、オーライというようになったという。



三井山野鉱　ボタ山捲場の内部



左からノミ、セットウ(上下とも)、キューレン(発破孔掃除棒)、マイトをつめる木棒、ツルハシ、ガンズメ、カキイタ

注

(1) 運搬夫を棹取というのは、石炭採掘の初期の作業方法から来ているという。石炭を斜坑で掘り進んで、次第に空気の流通が悪くなると、切羽近くに通ずる竪坑を掘って通気を良くした。この竪坑も、まだあまり深くないから、竹棹を下し石炭をかごに積んで引きあげた。この棹を操作する者を棹取と呼んだことからの用語だという。

(2) 大正期、入坑当時必要な道具は、ツルハシ、エビジョウケ(エブジョウケ、チリトリ、ボケともいう)、ガンズメ、カキイタ、ノミ、セットウ(石刀と書く)で、坑夫各人で準備した。ツルハシは、ほ先が交換できるようになっていて、五本位まとめて持っていた。ほ先をとがらすには、かじ屋に持って行ったが、他人の物と間違えないよう焼印を入れていた。

十、人の一生

1、結婚

親の意見が有力で、恋愛結婚でも親の気持に沿わないと、そうそう認められるものではなかった。結婚式は上役などを仲人に立て、その世話で行われた、酒と魚とトーフで夫婦杯を交わしたという話もあるが、婿方の青年が嫁入道具を受取りに行き、途中で荷物を受取る時に杖を組んで荷物を支え、長持歌を歌ったこともあるという。（大正の頃、飯塚市上三緒から三井漆生坑に嫁入り）

2、妊娠・出産

妊娠を知ったら、あずき御飯（おこわ）をたいて祝った。岩田帯を腹に巻いたが、長さ八尺のさらしを犬の産が軽いのにちなんで、戌の日に巻いた。粕屋郡の宇美八幡宮や嘉穂町の瀧の観音様などにお参りにも行った。妊婦は、なるべく動かしたがよいといわれ、産気づくまで働いた。坑内で出産した時は、男女にかかわらず祝福された。坑内では、事故で死亡することが多いのに、増えてあがるとは縁起がよいと喜ばれたのである。また、便所掃除をきれいにしておくと、きれいな子が生れると教えられた。

出産は人によって異るが、力綱にすがって生む人が多かった。産婆さんがいない頃は、隣近所のなれた人が世話をして生んだ。嫁の実家に帰ることはなかった。後、産婆さんが世話をするようになるが、今のように病院で出産することはなかった。後産は、家の床下に埋めていたが、後は産婆さんが処理をした。へその緒は、とっておいて子供がひきつけを起した時など、せんじて飲ませた。

子供ができない人は、粕屋郡篠栗の子安観音にお参りに行った。子供が続けて死ぬような時には、久留米の大善寺まで「道切り」に行った人もあった。

3、子育て

夫婦とも働く家庭では、子供を坑内に背負って下り、かごの中に入れて仕事のあい間に授乳していたという話もあるが、「それは、古い頃の話で」と、そうした経験をした人はなかった。近所の家庭にいる女の人に子守を頼んで仕事に出た。

子育ての行事には、男は誕生後三十日、女は三三日目にお宮参りに行った。炭坑だから山の神に参るというのではなく、例えば三井漆生坑では稲築八幡宮にお参りに行くように、その土地の神社に参った。初節句は、男の子には弓、女の子には羽子板・ひな人形・ちょう太郎人形（京太郎人形という人もあり、焼き物・張り物がある）を飾った。食べ物は、男はチマキ、女はヒシモチを作った。百日（ももか）は、あずき御飯を作って近所に配った。初誕生は、一升もちをついて、背中にからわせ、わらじをはかせて鏡もちを踏ませた。まわりに、そろばんや鉛筆など種々の品物を置いてその中から一つを取らせ、子供の将来を占って祝福した。これらの行事も、すべての家庭で行われたというのではないようで、行事内容は、出身地の影響が見られる。

4、葬祭

坑内で事故死があった時は、死者を台車に乗せ、坑外にあげる時は、セットウでセットウの頭をたたいて、「今あがりよる」という合図をした。途中、「ここは何方（なんかた）、何方とつき添っている人があがりよる場所を叫んだ」。死者の魂が迷わないようにということである。事故があると、駐在所の警察が現地に出向いて調査した。ダイナマイトやガス事故の調査は厳しかった。

一家の働き手が亡くなると、戦前はわずかな見舞金が出る程度で、残された家族は早速生活に困った。たまには、坑外の作業についたり、労務係などが独身者とめあわせ、生活の道をみつけてやることもあったが、しばらくは会社が黙認しているものの、やがては納屋を出なくてはならなかった。

一般に、人の死亡のときの世話は、八軒一組位の組内(くみうち)が行い、三井漆生坑では女が組長だった。

湯かんは、畳を一枚あげてござを敷き、たらいの中に水を先に入れ、湯を左手でひしゃくを使って加え、近親者が死者の体をふいた。着物は、近親者がさらしを一反買って来て、はさみを使わず口で切って、糸のしりを結ばないで縫い、左前にして着せた。

死者は北枕にし、茶わんに御飯を山盛りにして、はしを一本たて、花を一輪花びんにさし、線香・お明り（ろうそく）をあげた。神棚がある家では、白紙を張った。

棺には、御飯とダンゴと天保銭を六間ひもに通して入れる。出棺の時は、三回左回りにまわして出し、家の戸口を出る時茶わんを割り、座敷と庭を一緒にはわいた。野辺送りは、社宅からはずれた所にあった火葬場まで、行列を作って行った。農村部では、昭和の初期までは土葬であったが、炭坑では埋葬する墓地を持たないので、早くから火葬を行っていた。

遺骨は、近くの寺にあずけるのが多かったが、出身地に持ち帰る人もあった。

十一、年中行事

炭坑の年中行事で、最もにぎわったのが、山の神祭りであり盆踊りであった。

炭坑には、作業安全と炭坑繁栄を祈願して、山の神がまつられていた。山の神は、炭層の中心になる所にあって、神社の下を採掘する時は、その炭坑の終掘だといわれた。それだけ大切な神社なので、年一回の山の神祭りは盛大であった。といっても、炭坑によって個性があり、規模も違った。

三井山野鉱が、山野・口春にあった頃の山の神は、お稲荷さんで、今の九州指月株式会社野球場の西南方、町営住宅になっているあたりにあった。二月の初午には、石段に赤い旗が立ち並び、炭坑の人たちが参った。坑夫の嫁さんたちが、参詣者に茶菓の接待をした。

鴨生・漆生に移ると、英彦山神社や愛媛県大三島の大山祇神社を勧請した。山の神祭りは、鴨生では、桜の頃の休みの日に行われた。前日、祭りの役員は、英彦山神社に参詣してお札を受け、山の神の社殿に置いた。当日は、相撲・仮装行列があり、神輿も出て坑夫の青年が白装束で腰にしめ縄をはってかつぎ、炭坑住宅内を回った。神輿の下をくぐると、わざわいがないといわれた。

現在、山の神は、鴨生は三井鉱山竪坑トンネル堀鑿株式会社福岡支店（三井山野鉱第一竪坑跡近く）前に、石祠と鳥居は残っているが、御神体は返されている。漆生の方は、社殿も残っていない。漆生鉱業所労働組合長だった野坂弘義さんらが、大三島大山祇神社に御神体を返しに行ったという。御神体は石炭で、現在大山祇神社海事資料館に、全国の鉱石標本の中にかざられていて、漆生鉱業所の名票がある。

日鉄稲築鉱では、最初は十二月二十日が山の神祭りであったが、後十一月三日にかわる。互助会という組織があって、役員が一週間程前に大三島大山祇神社に参詣し、お札と御幣を受けて来た。当日は、相撲や踊りがあったが、神輿は出なかった。山の神の跡は、漆生大坪団地の西の岡の上に石祠が残っているが、草木に覆われて今

は注目する人もない。

新山野鉱では、大手炭坑のような派手さはなく、祭典と優良鉱員の表彰があった。

各炭坑とも、優良鉱員の表彰を行っていて、当日は飲食でにぎわい、山の神では酒樽の鏡がわられ、参詣者にふるまわれた。

山の神祭りが会社の主導性が見られるのに対し、盆踊りは炭坑住宅の人たちの主体的な行事であった。炭坑内の広場にやぐらを建て、初盆の家を回ったあと、やぐらを中心に円陣を組んで踊った。くどきが上手な人は、タナ組といわれ、やぐらに上って歌い、当日は晴れ舞台であった。炭坑には、各地から人が集って言葉のなまりも違うし、盆踊りの内容も出身地によって違った。しかし、くどきは違っても、調子と踊りに共通のものがあり、特別練習をしなくても踊りに加われた。三味線、太鼓にたんのうな人も多かった。三井鴨生坑では、アミヒキという哀調のこもった曲があった。

盆の行事は、仏さま迎はしなかったが、仏さまに季節の野菜や果物やそうめんなどを供えた。仏さま送りは、川端にお供え物を置いて、精霊さん送りといった。初盆の家では、ちようちんを下げ、各自で家にかざり壇を作った。中には、初盆は里に帰って親戚でしたという人もあった。

正月準備はまず、もちつきである。敗戦前までは、ツコツコさんといって、炭坑内の青年が数人で組を作り、ウス・キネ・セイロなどを揃えて、炭坑住宅をつき賃をもらってもちをついて回った。三味線を弾き、太鼓をたたいてにぎやかなものであった。炭坑外から商売で来る人もあった。もちをつく量は三井鉱では、各戸一俵位はつき、少ない家でも一斗はついた。正月の門松は今より派手で、近くの山から松・竹・梅を切って来て、家の前に立てた。大みそかには、そばを食べた。

元旦には、若水汲みの行事をする人もあって、共同の上水道から男が水を汲んで、洗面しお茶をわかす家庭もあった。狭い家の中に神酒と鏡もちを飾り、仕事に使う用具にはしめ縄をつけて一緒に置いた。もちをつく日は、十二月二九日はクモチ（苦もち）といって避けるなど、農村の民俗が、炭坑の暮しの中でも引き継がれていた。

年始には、大手炭坑の生活状況が少しは良くなった時代には、羽織・袴であいさつに行った。また、年末の贈物は、上役には必ずといってよい程していた。三井山野鉱では、正月休暇が十二月三十日から一月三日まで、盆休みが八月十二日頃までで、盆・正月には会社が雇った浄瑠璃などが行われていた。他に楽しみといえばバクチで、主婦たちも豆にぎりというバクチを楽しんでいた。数本の糸を束ねて、その中の一文銭を通した一本を引きあてる、ホオビキというのもあった。

戦前の楽しみの一つに、小学校の運動会があった。小学生を持つところは、前の晩から家族の観覧席の場所取りに行き、ゴザを敷いて帰った。当日は、酒さかな持ち込みの人もあり、子供の応援に親が飛び出す場面もあった。

会社主催の運動会もあり、地区別とか職場別に分れて競い、会社から賞品が出されていた。

三月や五月の節句には、子供のいる家ではお祝をした。男児が誕生した家の端午の節句には、のぼりを立てる家もあり、「のぼりが立っている所に行けば、酒にありつく」といわれた。大正年間は、まだ鯉のぼりや矢車はなく、のぼり旗だけで農村地区も同様だったという。

桜の花の頃には、職場の仲間や組内で、山の神で飲食することがあった。遠くまで花見に行くこともあったが、酒を飲むとよくけんかになるので、避けたという人も多い。

炭坑の各家庭の生活習慣は、里（出身地のことで、ところともいった）のしきたりが引き継がれた。しかし炭坑での労働は、農業のように季節的な節目があるわけでなく、長時間・重労働で厳しく、納屋に帰ると男は上り酒を飲んで寝るという調子で、その日その日を生き抜くことで精一杯であったし、人の出入りも多かった。だから、季節的・周期的な地域共同体の行事が発生する餘裕はなく、中小炭坑になる程、生活のゆとりはなかった。

十二、禁忌など

- 坑内で口笛を吹くと落盤がおこる。ー新入りの坑夫が知らずに口笛を吹くと、ひどくどやされた（なぐられた）。坑内で口笛を吹くと、天井を支えている山の神が油断して、天井を落すからだといわれる。
- せっとうとせっとうをからたたきしたら、怪我人が出る。
- 朝御飯におつゆをかけるな。

この二つは、坑内での死者をあげる時に、せっとうとせっとうをたたく、死者を湯かんする時、水に湯を入れることを連想してからのことであろう。

- 弁当に梅干を一粒入れておくと、災難を逃れる。
- 犬殺しが来たら坑内に怪我人が出る。
- イヌ、サルの言葉を使ってはいかん。
- イタチといわないで、カチカチといった。
- 坑内にさがる前に、クドのスミを額にぬってさがると安全。ーこれは、農村でも遠出をする時は、クドのスミを少し額にぬる風習があるので、里の慣習の影響であろう。
- 坑内では、ほうかぶりをしてはいけない。はち巻きはよい。
- 「他人のいうことは、よく聞け」という。ー炭坑は事故が多い所だから、先輩や上役など経験者の言葉には重みがある。「人の言ったことは、親の言葉として聞け」といわれていた。

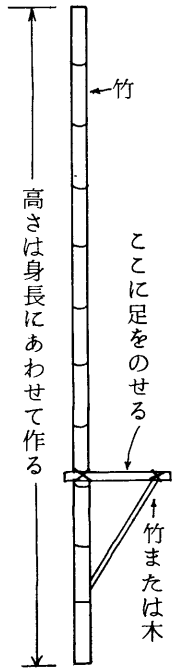
十三、子供の遊び

大正期の炭坑での遊びの聞き書きだが、昭和になっても遊ばれていたし、農村部でも同様の遊びがあった。

1、男の子の遊び

- ねんぼーー木を切って先をとがらせた三十センチほどの棒を投げて、地面に立てたものに、他の者が同様な木の棒を投げつける。もし先に立っていた棒を倒せたら、倒れた棒は倒した子供のものになる。
- けり馬ー二・三人が前かがみになって、前の者の腰を拘いて一列に並び、これを台という。他の数人は、この台に飛び乗ってくずそうとする。台はゆすって落そうとする。落ちそうになると、乗った者は台から逃げるが、その時、台の一番後ろにいる者からけられると、台と入れかわる。
- しかしか何本ー二・三人の遊びである。けり馬のように、柱などをつかまえ前かがみになった台の上に乗った者が、こぶしを作った手の指を何本かのばし、台の者にわからないようにして、「しかしか何本」という。台がそれに答えて出した指の数に合うと、台を交代する。
- ぱっちんー長方形（五×八センチ位）の厚紙の表・裏に絵が印刷してあるものをいう。そのぱっちんを地面に置いていて、複数の子供たちが順番で、一枚のぱっちんを地面にたたきつけて、その風圧で地面のぱっちんを裏返しにする遊びである。

●おいちょかぶ―ばくちの一種。ぱっちんの裏の絵や数字を使って行う。
●らむねん玉―小さくて丸いガラス玉を地面に置いていて、あて合いをする。
●陣とり―二組それぞれ陣地という場所を設定して、けんけんで相手の陣地に近づいて、出て来た相手を倒す遊び。
●竹馬―〔図5〕のような竹製の乗り物を作り、歩きまわる。
●ちゃんばら―竹や棒で刀を作り、映画の時代劇をまねて斬り合いをする。元気が良い女の子は、ねんぼ・竹馬やちゃんばらの遊びに加わることがあった。



〔図5〕竹馬

●かっちよわな―遊びというより、鳥をとるわなの一種で、近所の山に竹で作ったわなを仕掛け、小鳥を取っていた。この種のもので単純なものは、レンガやトーシを棒で支え、その下に米などを置いていて、鳥が棒にあたると、かぶさるようにした。わなをかけると、「今日はかかっちょるかも知れん」と、期待で学校の授業もうわのそらの時もあったという。

2、女の子の遊び

●おてだま―小さい布の袋の中に、ハゼの実やジュズダマの実を入れて作り、落さないように、続けて何回も投げあげる遊びで、二つ組みとかおさらいなど多くの遊び方があった。ハゼの実は、大正中頃ろうそく屋で買うと、一銭で五・六個できた。

●めんこ―土製の径一・五センチ位の平たいもので、いろいろな形をしたものがあった。それを、地面や部屋の中で、指ではじいてあて合いをする遊びで、おはじきといった。昭和に入ると、ガラス製になり、ビーダマといった。
●かべこがし―壁の手前に線を引いておいて、めんこを壁に投げつけ、線の内側で最も壁から遠い所のものから、指ではじいて当ててとる。正月三カ日など、大人もこの遊びで金をかけることもあった。
●竹なご―竹のへらを十本位握り、手を離してつかみ直した時に、竹の表だけをどれだけ揃えられるかという遊び。
●石けり―地面に輪を書いて、複数の子供が輪の中でけんけんで石をけり、手がとどく範囲に線を引いて、広く取った方が勝ち。また、地面に線を引いて、一定のルールの下に、ケンケンで石をける遊び。
●陣とり―地面に輪を書いていて、じゃんけんで勝った方が、手をひろげて輪を書き、広く取った方が時ちとする遊び。
●あやとり―両手の指で、ひもを使って種々の形にかえる遊びで、一人で遊ぶこともあるが、複数ですることが多かった。形を作る順序は決っていたようで、川・ひしがた・はしご・つづみなどの呼び方があった。
●人形さん作り―トウモロコシ（トウキビという）の皮で人形を作

トーキビの皮で作った人形

り、頭は島田などに結わせた。布で作った着物を着せ、友だちと見せあったり、ままごと遊びをした。ままごと遊びの時は、マッチの小箱でたんすや布でふとんを作ったりした。

●すごろく・イロハがるた―どちらも屋内の遊びで、男の子ときには大人も加わっていた。

十四、むすび

炭坑の生活といえば、「斬った、張った」の暴力ととばくに明け暮れた毎日で、文化とは隔絶された惨たんたる所であったと見られるむきがある。だが、老元鉱員は「あんた、毎日毎日酒飲んであばれたり、ばくちばっかりしよったんじゃ、石炭が出るわけないやないな。けんかすることも、ばくちすることもあったろうが、そりゃ一部のもんで、多くはまじめに黙々と働きよったとばい」と語られた。炭坑の人たちは、長時間・重労働に耐え、貧しくても差別されても、毎日毎日の危険な作業を働き抜いてしたたかに生きたのである。そうでなくては、筑豊が明治以後の日本資本主義経済発展の礎としてのエネルギー源には、なれなかったはずである。

戦後、石炭を黒ダイヤといったり、炭坑節が全国に歌われて、経済復興の主役になるが、昭和三十年代からの、石油エネルギーへの転換の中で、筑豊の炭坑は姿を消していく。炭坑で働いた人たちは、多く県外に職を求めて、筑豊を後にした。今、飯塚市の商店街の華やかな装飾や多くの人出を見ると、炭坑閉山の苦悩は、遠く過去のものになりきった観があるが、物・心両面に残された傷あとは、なかなか消えるものではない。地盤沈下などの鉱害はもちろんのこと、都会に職を求めた人の中に、炭坑で働いたとしないでほしいと、隠したがる人たちがあると聞いた。昭和四十年の山野鉱爆発の被害者家族の補償は、十七年後の昭和五七年一月、裁判の末やっと和解が成立した。家族の方は、「労働者を大事にせん企業は繁栄せん」といわれた。

一方、若い人たちは炭坑を知らなくなりつつある。かっては、黒々と天にむかって鋭角的に突きあげていたボタ山も、いつしか土木工事用に取り去られ、残ったものも背を丸め、緑の草木に覆われつつある。子供たちから、「石炭は、あのボタ山から堀りよったとやろう」と問われて、そういう考え方もできるのかと、時の流れの早さに驚き、今の筑豊が抱えている多くの問題を考えさせられるのである。

この「炭坑の暮し」は、「炭坑を知ろう」と昭和五三年から五七年までの間、稲築町内で炭坑にかわった人々（農村部や商店街の人も含めて）の話を聞いてまとめたものである。

稲築町公民館の「ふるさと講座」や、公民分館などに集っていただいて、稲築高等学校郷土部の生徒と聞き取り調査をしたり、個人的におたずねした。貴重な資料や書籍も見せていただいた。皆さん、苦しくにがい思い出もあったろうが、親切に教えていただいた。その内容は、大正期からの話である。

この調査には、稲築町公民館主事久家貞美氏の紹介や仲介に負うところが大きい。多くの人に御世話になったが、現地調査での立話などでは、御名前を聞かなかった。記録できた方々の御芳名と調査に参加した生徒名を掲げて謝意とする。（アイウエオ順。敬称略。（　）内は生年。Mは明治、Tは大正）

相緒カナヱ（T4）、荒木富士男（T2）、安藤清（T3）、石川リン（M39）、井立ハツヱ（T4）、今村チヨ（M38）、小笠原虎之助（M35）、小野マスヨ（M38）、加来榮（M37）、茅野アサヱ（M34）、小峠源十（M38）、迫村喜作（M41）、貞池アサノ（M

38）、高橋信夫（M40）、中野徙（M29）、野坂弘義（T7）、野見山岩蔵（M29）、八田保政（T2）、服部勇雄（T4）、原本トキヨ（M41）、松井トキ（M44）、松岡筈美（T元）、眞鍋カスヱ（T6）、山下正義（T2）、渡瀬義雄（M42）、渡辺シズヱ（T元）。

生徒名。青柳幸男、秋吉広宣、井上ますみ、西村道明、原俊英、矢永勝彦、山本勝江、吉田博基、浅田直子、石坂仁代、折田協子、川崎嘉江、栗原和恵、嶋田英子、杉本恵一、村田由加里。

最後に、記述について「砿」「鉱」「坑」の使い分けは、「砿」「鉱」は鉱業所全体としての範囲の炭坑で、「砿」は明治・大正期企業名や書名等に使われたもの、「坑」は某鉱業所一坑・二坑のように、坑口単位の狭い範囲の炭坑に使い分けた。

（一三二頁より）

正　貨	四〇八・六六〇
合　計	二、七一〇、七九〇・六〇〇

利益勘定

当季利益金	一〇五、〇四四・二七三
前季繰越金	一一、〇五一・一九七
合　計	一一六、〇九五・四七〇
内	
役員賞与金	七、三〇〇・〇〇〇
積立金	一〇、〇〇〇・〇〇〇
恩給基金	五、〇〇〇・〇〇〇
配当金（年八朱）	八〇、〇〇〇・〇〇〇
後期繰越金	一三、七九五・四七〇

右之通リニ候也

大正三年十一月

長崎市常盤町三番地

松島炭鉱株式会社

取締役会長　古賀春一
常務取締役　細　正之助
取　締　役　牧田　環　　頼尊淵之助
　　藤岡浄吉　　荻田延治郎
監　査　役　馬場卓一　　岩田謙三郎

大正三年十二月十一日　坑夫の惨死

東松浦郡厳木村貝島炭坑々夫伊藤虎松（37）真島武雄（17）松本ケイノ（15）の三名は一昨夜より同坑坑内右九左曲延ひにて採炭従事中、昨日午前一時頃天井の岩石俄然墜落し圧迫せられて惨死をとげたりと。

（二一二頁へ続く）